

ディヤコニア



説教

「共に苦しみ、共に喜ぶ」

コリントの信徒への手紙一

——12章26～27節——

森 田 進

日本基督教団 大泉ベテル教会牧師

9月22日(木) 秋分の日は、ベテスダの日である。千葉県館山市にある旧海軍の砲台跡に建つ「かにた婦人の村」に大泉母の家から車で、いざ、出で立つ朝です。午前8時はずみ寮を出発。秋雨前線と台風九州接近が重なって心配でしたが、「恵みの雨です」と小川シュベスターがキツパリと言いつり、私どもはほっとしました。海ほたるも強い雨、休憩せずに通過。木更津から38^キ南下。土砂降りになりました。「着きました」。おやまあ、勾配がきつい山頂だ。気を付けながら車がそろそろ上ると、「かにた婦人の村」の玄関でした。礼拝堂はさらに上。大泉ベテル教会の山本洋子幹事は他の人と連れ

だつて徒歩で上って行きました。さすがにボランティア活動に力を入れる大泉ベテル教会、足腰強し。私はというと、車にすがって上りました。あつ、夏蜜柑畑だ。緑たわわに逞しく、大きくなっている。眼下遙かに田んぼが見えます。

礼拝堂の前に、白い芙蓉とオレンジ色のランタナ。礼拝堂の奥の壁面は薄い黄土色の壁紙。実はウガンダの孤児たちから援助を求めて送られてきた航空便の封筒が貼られているのです。礼拝前に階下の納骨堂に案内されて、深津ご夫妻始め、天上の友のご遺影とお骨に挨拶しました。ヨハネ8章の姦淫の女を素材にした掛井五郎の彫刻作品が意味深く飾られています。

昼食は、鯖と昆布の出し汁が効いたすまじに始まって、関西風味です。ほとんどの献立に、かにたの農園、果樹園、ナチュラル農園からの収穫物が活かされています。戦後何度も食べた薩摩芋の茎と葉っぱの煮浸しを感慨深くいただきました。栄養士さんたちの手作りに愛情がみなぎっていました。続いて出席者全員

のスピーチ、在住の婦人たちの斉唱など。午前から昼下がりで、世俗の価値観にまっすぐに対抗している「かにた婦人の村」の生き生きした暮らしを、ほんのちよつと覗かせていただきました。旧海軍砲台跡に建てられた「かにた婦人の村」は、戦争の否定と平和を志す人々によって運営されています。帰路、千葉県側から東京を結ぶ海ほたるに立ち寄りました。雨は上がっていました。回転寿司を食べ、かにた訪問の一日をあらためて感謝し充実感を覚えました。

なぜでしょう。かにた村全体に溢れている連帯感に私どもも共鳴音を発したのです。在住婦人たち、一般職員、理事会、支える者、関係者一同が直に会ったという感動の波が押し寄せたのです。

聖書の今日のテキストの小見出しは、「二つの体、多くの部分」です。26節、「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。」この部分で注目される箇所は、「尊ばれば」です。

この限定仮定条件は、おのおの（各々）という意味なのです。この尊重を「尊ぶ」という和語で表現すると、やわらかに心に染みこんできます。これが主権在民、

個人の人權尊重であり、民主主義の原理なのです。この前提の上で、毎日の暮らしが成り立っているのです。と言いたい

ですが、現在の世界の現実には、悲しくなるほど生きにくくなっています。効率、便利、軽薄短小ばかりが目立って、丁寧にじっくりと観察して味わう暮らしがみるみる遠退いて行くような気がして悔しくてなりません。政治、経済的利益、数字、統計、データ優先の社会が、素朴な初々しい人間の関係を破壊、すなわち不信と憎悪がどんどん膨らんでいく気がしています。こんな世俗世界の現実を否定して、人間らしい暮らしを回復していくにはどうしたらいいのか途方に暮れるのです。

こんな私に、今日のテキストは念を押すように語りかけてきます。

「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。（27節）」

これは、キリスト教の教会論ですが、イエスさまは、次のようにもおっしゃっています。

「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」（マタイ伝18章20節）

初めて「かにた婦人の村」を訪れた私は、直感した。ここはイエスさまの体なのだ。この山の狭い坂道の上り下りは、みんなの足腰を鍛えた。そして開拓、汗を流した。田んぼで米を作った。畑で野菜を育てた。海で貝採り、釣りをした。自給自足に近い暮らしを通して食してきた。同時に、朝に夕べに祈りと感謝を献げて、み言葉を食べさせていた。生きて働く暮らしの原理の中で、人々は深く結び付いて共同体を築いている。

昨日10月23日、三位一体後22主日礼拝でした。ドイツのベテスタ奉仕女母の本部からシユベスター・エリーザベツトさんが大泉ベテル教会の礼拝に出席してくださいました。日本のベテスタ法人の

関係者、伊藤瑞男前牧師ご夫妻などもお迎えして、楽しくなごやかな歓迎会のひとときを過ごしました。そして、大泉ベテル教会と、日本とドイツのベテスタ奉仕女母の家、かにた婦人の村との密接な結びつきの枠組が分りかけてきました。

ドイツは押し寄せる難民に直面して苦渋しているそうです。ドイツのキリスト教は、どのように難民問題に立ち向かい、伝道できるのか、私は大いに期待しています。同時に日本のキリスト教も、今日隣人とは誰か（貧困の中に置き去りにされている子どもを含んで）を問い直して行かねば、と思います。世界のキリスト教徒は、今こそ、さらに国際的に手を結んで福音のために行動しなければなりません。原始キリスト教は、ユダヤ教の異端として出発しました。最初から人種、言語、文化の違いの渦巻きの中で、しかも、ローマ帝国の圧政に苦しめられながらも、民衆の中に広がって行つたのです。共に苦しみ、共に喜ぶ暮らしを、現代の私どもも貫いて生き抜きましょう。

追悼

シユヴェスター

エリーザベツト

奉仕女 天羽 道子

愛する

シユヴェスター・エリーザベツト!

ほんとうにありがとうございます。

あなたは、日本のベテスタ奉仕女母の家の設立から、かいた婦人の村の設立に至る激動の17年半に、あなたの若き日々を全力投球してくださいました。心から感謝いたします。

本年7月10日に90歳の生涯を閉じて帰天されたシユヴェスター・エリーザベツト・フョーリンガーの告別式と埋葬式に参列し、姉に対する言葉なき感謝の思いをお伝えすると共に、神に祈りました。姉妹が日本のために捧げてくださった17年半の労を神が豊かに嘉し、永遠の安らぎと憩いの中に入れてくださることを。



第5回着衣式 1958年5月25日

エリーザベツト姉（以下E姉）は53年10月4日来日。その前年に来日されていたシユヴェスター・ハンナ・レーヘフェルトと共に、日本の奉仕女運動を助けるためでした。この時すでに、深津文雄牧師の許には4人の奉仕女志願者が待機していて、共同生活の場として拝借することになっていた埼玉県加須市にある「愛の泉」に新設される診療所の定礎式に参加したのです。その時の、ドイツのデイアコニッセのお二人と、日本の奉仕女志願者4名の初顔合わせは、喜びと感動に満ちたものでした。

日本
におけ
る最初
の奉仕
女事業
の誕生
は、文
字通り
無から
の出発
でした。

それを象徴的に表すのは、5月14日から始められた姉妹たちの共同生活が、電気もつかず、水も出ない未完成な建物で始められたことです。この「創造と開拓」の歴史に、E姉は人生の中で一番力のみなざる27歳から45歳にかけての17年半を差し出されました。異国の地であって、E姉にとって決して生易しい年月ではなかったはずですが、共同生活の形成も、奉仕女教育と訓練・指導も、何もかもゼロからの出発でしたから。

そして、指導姉妹として、11回の奉仕女志願者の着衣式と5回の祝福式に、大きな喜びを持たれた反面、入館者の半数近くの退館者を送らなければならないというつらい体験にも耐えられなければなりませんでした。

共同生活と訓練を始めた初期1年目は日本語習得に力を注ぎつつ、まずは日本人理解に努められました。お互いに習慣や民族の違いを超えて、主にあって一つであることを固く信じ、ひたすら共同生活形成にまい進した1年を経、第2回着衣式には7名もの志願者をむかえて、夢

と希望に胸をふくらませたのです。

しかし、母の家創立3年後の11月、1年間の休暇で帰独されていたハンナ姉が、ドイツの母の家を退館されたという誠に衝撃的な知らせが届き、一同驚きと悲しみを受けた。殊にE姉の受けられた打撃はいかばかりだったでしょう。

E姉も、その後59年6月に1年間の休暇で帰独された折、派遣母体であるアメリカの福音協会本部より再派遣しないとの通告を

受け、休暇を過ぎた半年後、ドイツのベテスタ独自の派遣継続決断によって、

日本に戻ってこられたという苦しみにも遭遇されました。この時のE姉の苦悩は推し知ることが出来ませんが、ドイツのベテスタが独自に派遣の決断をされたこ



レース編み

とに對して、尽くせない感謝を改めて寛えます。と同時に、E姉の強い意志と働きかけを想像します。

E姉が共に担ってくださったベテスタの創設期は、母の家の誕生の4年後にいずみ寮の、その7年後にはかにた婦人の村の設立という、まことに急な坂道、激動の時代でした。姉妹共同体にも心の重い問題を抱えながら、E姉は、ドイツのベテスタや教会関係にも資金援助を精力的に働きかけてくださいました。ドイツからいかに大きな援助をいただいたか、ベテスタの歴史の中にきちんと刻まれなければならぬと、改めて思います。

65年4月1日のかにた婦人の村開所に際し、E姉は医務担当として就任。ドイツ寄贈のフォルクスワーゲン・ブスを運転して、あちこちの病院へ走りまわる白いハウペの外人を、人々は畏敬のまなざしをもって眺めていました。2年で交代し、休暇のため1年の帰独。68年3月に戻ってこられた後の3年間はベテスタ本部付で母の家の生活と、大泉ベテル教会

の業に持てる力を發揮されました。

「ゲマインデ・シュヴェスター」として近隣の老人・障害者・チエ遅れの子ども、病人たちへの見舞い、看護は、実に手ぎわよくなされた。わずかな時間を用いてよく人を訪ねた。その働きは送別のとき、あの人もこの人もエリーザベツト姉によつて励ましを受けた群れとして教会にあつまつた。この者を今、日本は失う。」
—当時、いずみ寮寮長であり、大泉ベテル教会の牧師をされていた藤巻三郎牧師がデアコニア誌に、こう書かれています。

E姉は帰独された後、76年10月に5姉妹で、90年4月に3姉妹で、00年11月23日深津文雄牧師追悼のつどいにオーペリンのシュヴェスター・イングリットと共に、02年5月に14名の方たちと訪日してください、「ベツトさん」との再会の喜びを、かにたの村人たちにも与えてくださいました。

帰天されたE姉に再び申し上げます。
17年半を、ありがとうございました！

(かにた婦人の村 名誉村長)

オーベリン ベテスダの奉仕女長来日

10月21日成田空港9時半。駐車場に車を置き、スカンジナビア航空はどっちのウイングかしら、とロビーを歩き始めた時、向こうからベテスダの奉仕女長、シユヴェスター・エリーザベットが歩いてこられるのに出くわした。飛行機が早く着いてしまったとのこと。

来日の話は昨年の5月にも出ていたが、7月に故Schw・エリーザベット・フォーリンガーの告別式に伺った時、「是非この秋に、日本の母の家を訪ねてください。来年では遅いのです。」と強くお願いし、予定が詰まっていますと言われながらも時間を作ってください、今回の来日にこぎつけた。「トランクが重いよ。何故だと思っ？ プンパーニッケルが入っているからよ。」と、相変わらずのいたずらっぽい笑顔と、太く柔らかい声で、単語を探して頭の中がぐるぐる回っている緊張を和らげてくださる。

日本のベテスダ奉仕女母の家は、ドイツのベテスダからの大きなプレゼント。(5頁上段参照)現在の奉仕女長のSchw・エリーザベット・ドウレックホフに、日本のベテスダの働きと現状を見ていただきたいという、私たちの願いがいよいよ実現したのだ。

「この間イギリスに行つて、私も左側の運行の運転をしたのよ。」などと話題を作っていたきながら、丸の内へ寄り、皇居の森を見下ろしながらのランチ。



Dを見ていただき、子どもたちの作ったお団子で、一緒におやつ時間。その夜は、いずみ寮のステップハウス・ホテルの家の畳の部屋で、早めに休んでいた。

ドイツのベテスダの奉仕女は、大きな病院での働きが主だったので(ご自身もベテスダの病院で教えておられた)、日本のベテスダがどのような働きをしているのか、殊に「日本の奉仕女でなくてはできないこと」と創立者がいったこととはどんな働きなのかを知りたい、との強い思いをもつて来日された。

最初の訪問先・茂呂塾保育園では、庭で遊んでいたこともちかから「グーテンモルゲン！」と歓迎を受け、茂呂塾の保育のDV母の家に滞在中は、4人の奉仕女たちと、毎朝の祈りと食事を共にし、故Schw・ハンナや故Schw・エリーザベットと歌ったいくつものコーラルを歌った。共に祈り共に歌うことは、ほかのどんなことよりも、一体感と、力とを与えてくれる。食堂に出られないSchw・道子のお部屋を訪ねて(現在、股関節骨折の手術のため入院中)、親しく交わりを持ってくださり、Schw・操の入居されてい

るホームも訪ねて、とても喜ばれた。

22日は、いずみ寮の働きを見ていただき、法人関係者、いずみ寮と茂呂塾保育園の職員有志等20名が母の家に集い、歓迎会が開かれた。心のもった肉料理、魚料理、野菜料理を数品ずつとデザートもついたフルコースのバイキング。数種類のとびきり美味しいパンは、理事長ご自慢のお手製で、会話もはずんだ。

23日は、大泉ベテル教会の礼拝を共に守り、会員や前任牧師夫妻も交えての昼食会が持たれた。

夕食はいずみ寮の食堂で利用者との交流も。Schw・エリーザベットの笑顔に、利用者も親近感をおぼえて、和やかな良い交わりの時が持てた。好きな食べ物は何ですか名物は何ですかなど利用者からの質問のあと、ウッパタルのモノレールの絵ハガキを見せて、タッフィーという3歳の子象の話をしてくださり、一気に場が和んだ。(サーカスの団長さんが宣伝のために小象をシュベーパーバンに乗せたが、小象が怖がってドアを壊して5m下の川に落ちてしまったお話。小象は無

事だった。)お土産に用意した手

織りのタペストリーをとっても喜んでくださった。

24日は理事長の車で館山へ。練習を重ねた

「ゲーテンタッグ」「ヘルツリッヒヴィルコメン」の挨拶に、「こんにちは」と日本語でにつこり言われ、大笑い。

会堂・納骨堂をご案内した後は、農園のスタッフが「歩いて登りましょう」と山の上の畑へ。古民家のゲストハウス・たちばな亭で、農園の人たちと珈琲タイム。Oさんの、「ドイツでは私たちみたいな人の労賃はいくらですか?」という問いにも、労働についての、誠に本質的な話をして下さった。

休憩の後は、相浜ガーデンを訪問。

Schw・エリーザベットの笑顔に、Schw歌子も大きな喜びと感激を全身で表していた。夕食は、館山ならではの地物鮪。

25日は、かいた婦人の村とエマオをご



案内し、昼食時のお誕生会は文化祭風に、歌や楽器やダンス、編物・織物や陶器の紹介、と村人の姿を見ていただく。夕食はある寮で、日本の肉じゃがとドイツ風ジャガイモ料理を味わい、肉じゃがが美味しいと。その後、よく歌っているドイツのコーラルや、知っている限りの降誕祭の歌を共に歌った。崖の上の管理棟を指さして「Schw・道が、もう降誕祭が来たのかしらってびっくりしているわよ」といいながら、村人がラテン語の歌詞も全部覚えていることに驚かれる。みんなの心がひとつになる歌の持つ大きな力を、改めて感じる。26日朝7時、村人たちに見送られ、成田に向けて出発。

オーペリンの滞在は正味5日間と短かったが、多くの本質的な語らいを持つことができた。彼女との対話から得たことを、各々の働きに生かしていこう。

(文責／塩川成子)

1か月という短い期間に、おもてなしの準備をして下さったおひとりひとり、本質的な話合いをするのに助けて下さった通訳の方々から感謝します。

法人の歴史

かいた婦人の村編③

1965年3月31日、朝日新聞は全国版に4段抜きで次のような記事を載せた。

「知恵遅れの百人を特別指導

知恵遅れで普通の施設には収容しにくい婦人だけを集め、気長な生活指導で自力更生させる『かいた婦人の村』が四月一日、千葉県館山市大賀に店開きする。売春防止法による六十余の婦人保護施設などから、特に知能の低い人たち約百人を収容し独特の指導で、隠れた能力を引き出すのが目的。わが国では初の施設」

翌4月1日かいた婦人の村開設。

その日、兵庫から5名。5日午前、岩手から1名。午後、東京から15名。7日、長野から2名。8日、福岡から5名。9日、静岡から2名、佐賀から1名。10日、岐阜から2名、群馬から1名。11日、北海道から7名。13日、山形から2名。16日、神奈川から6名。23日、大阪から3

名の入所。——わずか1ヶ月の間に、すでに東京から移住していた2名を加えると54名。日本全国の都道府県の婦人保護施設で更生指導をしたが、困難であった女性たちが入所した。開所式を4月26日に控え、事故続出。苦情、脱走、拒食、暴力、自殺未遂、発狂……。重荷耐えがたきものあり」と深津の23日の日記にある。せめて開所式の間だけは静かに——と願ったという。

式は、三笠宮殿下はじめ、厚生省、千葉県、館山市、売春対策関係者など53人の来賓を迎えて、バッハのブランデンブルグ協奏曲4番の2が静かに流れる中、食堂で始められた。玄関前に54人の村人と職員一同が並んで（主よ、われら立つ）を歌う姿が写真に残されている。

このコラールは、後に「3年前の開所当時を思い浮かべると、今でも身震いしなくなるものがある。」と言わしめた、気が狂いそうなほどの時に、「祈ることもできない時は歌え！」と言ったマーティン・ルターの言葉を思い出した深津が、夕食の行列の後に並ぶと、「みんなも、う

たおう！これは私が訳した大好きなうただ！」と教えたコラールであった。——（主よ、われら立つ）——
初年度の入所者は87名。

「一年間で、職員の三分の一が消えてしまった。」その頃は全職員が住み込みで逃げる場所もない。職員も入所者も、まるで伸びきったゴムのように、疲れ果ててリズムを失っていたその生活の中で、初めての夏を——夏祭りとして踊り6夜、遊戯、音楽、映画などを2週間と、連日海水浴を楽しみ——乗り切る。

初めての秋、どんどん職員が入れ替わる中にも、入所者は定着して、畑の芋ほり、芋喰い。山頂で生まれて初めての運動会。とにかく土にまみれ、心の奥底から笑いこぼる幸せを十分に味わう。職員も久しぶりに緊張をほぐす。

初めての冬、降誕祭。「歓楽と狂態の思い出しかない人たちに、だからこそ本物の降誕祭を最大のエネルギーを傾けてやってみせようと決意。」古くティロルに伝わる誰も知らない民謡を組み合わせて、自作自演のページェント（聖誕劇）が上

演される。

その降誕祭の様子が（奉仕女から祈りの友への手紙）の中に記されている。

「二十五日、暁を破つて職員による（エサイの根より）の行列。十二時からクリスマスディナー。かにたの全家族がそろつて食卓に着くのは開所以来初めてのこと。六時からの聖誕劇は広い食堂を二つに区切り、日ごろお世話になつて人々を招待し立錐の余地もない。職員に後楯された導入歌に続いてD棟による宿屋の場面。次いで若さにはちきれそうなF棟を主流とする牧人。（ゲローリア）の輪唱に合せてそらいの白衣をまとつた天使群―かにたではいちばん「幼い」グループの総出場。ある人は手を上手に大きく動かし、ある人は手首から先だけをチョコチョコと動かす。が、そこに何らのてらいも恥じらいもない。本物の御使いもこんな表情をしているのだろうか、などと考えると眼鏡がくもり、声がとぎれそうになる。C棟の博士たちが星に導かれて登場。この日のためにわざわざ翻訳され、皆がすきでたまらなくなつてし

まった歌（みよあかきほしの）に合わせて。かくして（まぶねのかたえに）で全出場者がまぶねを中心にして出さろう。本当のクリスマスをまだ知らない町の方々にも共にこの歓喜を味わっていたきたいとの願いから催された、わずかに時間足らずの集まりを、キリストはこの世の最も小さい人たちを用いてこんなにも美しいものとしてくださった！

アドヴェント・アドヴェント・アドヴェント・アドヴェント・ワイナハテンの歓喜。これが私自身にとつても、入館以来九年目にはじめて体得した御降誕の神秘かもしれせん。」

深津もその時のことを、「歌は所作となり衣装となり光となり想いとなつて、人を天に誘つたのです。」と書いている。

「人間が、この世に生を受けるかぎり、まったく無用の存在というものはありえない。もし本当に無用であつたら、その人はこの世から取り去られているはずである。人間をこの世に送りこんだものは、神である。」「この全能者が、深い摂理に

基づいて生かしておきたいものを、彼以外のたれかが、殺すことはできない。」

「ここでは、かつては捨てられた世界が、ふたたび拾いあげられ、前には不可能とみえたものが可能になり、絶望のほかなかつた人間に、新しい希望をいさぐようになる。この、みじめな、こわれてしまった人間のなかに、神の創造の秩序を訪ね、《神の似姿》をさえ見出そうとする―その精神力こそ、信仰でなかるうか？われわれが、どれだけ、人間を信じぬけるか―それによつて神への信仰が測定される」と自分に言いよせながら、人が捨てるといつたものを、ひとつづつ拾い集めて3年、18の都道府県知事と契約し93人を迎えた。「わたしが皆の前に立つとき、いつも口には歌があつた。」「言葉では交通のつかない《かにた》の人々に、歌なら入り込んでゆく。」「人間が生きているということは、律動していることである。律動していることは、音楽していることである。ここに壊れた人間を修復する鍵が発見されたのである。」

（天良ささ子）

*参考資料「ディアコニア」66〜82号

施設だより

施設設備あれこれ

いずみ寮 矢島一夫

昨年4月にいずみ寮の職員となり早くも1年7ヶ月が過ぎました。いずみ寮では事務と施設設備を担当しております。この1年にあつた工事やいずみ寮の施設設備についてお話ししたいと思います。

大きな工事としては、東京都の平成27年度環境改善事業補助金によって、南側道路沿いの塀と正門の門扉を付け替えました。さらに、庭のブロック舗装とテラスデッキの設置や、駐輪場の屋根などの工事を行い、外からの眺めがかなり変わりました。塀の中ほど2ヶ所に



ゴミステーションのためのスペースも作り、近隣の方のお役にも立てています。

庭は白、こげ茶、赤茶の3色ブロックのモザイク舗装で、雨の日もぬかるむことなく、庭がきれいで、とても明るくなりました。バザーなどの庭を使う行事が楽しみです。

また、駐輪場の改修によって、番犬のウメちゃんの家も横に移動して専用のスペースになりました。

もう一つの大きな変化は、昨年9月より営繕のスタッフとして小幡勇治さんが加わったことです。小幡さんは建築や土木の仕事の経験が豊富で、確かな技術と素晴らしいフットワークを持っています。彼は草刈り機、チェーンソー、様々な電動工具を使いこなし、足場を組み、水道、建具、家具、電気、どんな補修もOKです。

圧巻だったのは、管理棟屋上にある給水タンク塔の塗装作業でした。小幡さんは塗装がはがれてサビが浮いていたタンク塔に登り、足場をかけて、電動工具で丹念に古い塗装を落として地金を磨き、

真っ白に塗装し直してくれました。

本来、

業者さん
にお願
いするよ
うな作業
でしたが、
ほぼ一人
で、まさ
にプロの
手際で



行ってくれました。本当に心強いです。その他、日々の補修作業は様々です。草刈りや庭の通路に滑り止めの砂利を敷く屋外作業や居室のカビ取り、水道の部品交換などなど。居住棟のトイレが詰まってあふれたこともありました。たくさんの方が生活する施設なので、色々なことが起こります。

困難を抱え、回復に取り組む利用者さんが少しでも安心して生活できるように工夫しながら、これからも施設設備の仕事に取り組んでいきたいと思えます。

日本のベテスタを、直接訪ねたいと来日されたエリーザベツト姉は、21日からの6日間、実に精力的に各現場に足を運び、ご自分の目で確かめ、質問し、交流された。この6日間の殆どを共にした中で、ドイツのベテスタの現況を伺い知った。今年若い姉妹お一人が加わった喜びの一方、現員49名の中、現役19名とのこと。大から小へと徐々に縮小されて

きている現実を背負いながら、すべてを受容されているエリーザベツト姉の温かなお姿に感じ入った。

天羽 道子

*

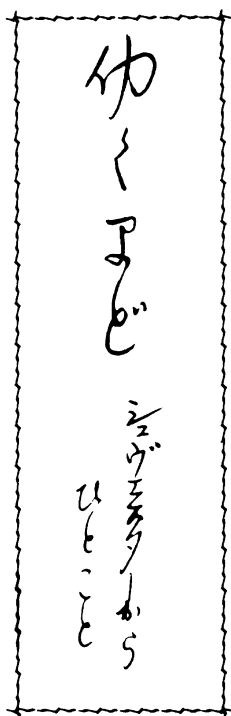
10月24日の夕方、ドイツから来られたエリーザベツト姉が訪ねて

くださいました。本当に嬉しく嬉しく、感激しました。何年前になるか、ドイツの母の家をお訪ねしたことを思い出しました。また、私が、ドイツからいただいたフォルクスワーゲン車で毎日通院者を乗せて、病院を往復していたことなども思い出しました。訪ねてくださって心から感謝しています。

桜庭 歌子

今年の夏もきびしい暑さの中で守られベテスタの日は「かいた村」での楽しい交りもてたことが感謝でした。ドイツから日本を訪問して下さった奉仕女長を迎え、短くも親しいお交りのできたことそして何処でも高齢化の問題を抱えて、祈り合っていくという現実を知りました。

小川 都代



この頃、屋内を移動するのにも足がよろめき、杖はあまり上手に使えず、シルバーカーを使う事になりました。しかし少し大きすぎて小廻りが利かず、狭い室内の置き場所を考えなければならなく、色々検討の結果、ホームの主任さんとタログを見て注文しました。山下 操

*

「一粒の麦」がどこに落ちるかによって人生の歩み方が変わるように思う。

私は若き日にキリスト教に出会い、「良い地」に種がおちて多くの信仰の友を与えられて現在があることに感謝。細井陽子

*

生かされて亡き友偲び終戦日

風に雲水流るるや秋の天

蜩の鳴き声失せし淋しさよ

9月22日、ベテスタの日。降りしきる雨の中、いずみ寮職員の上質な運転の車に乗せて頂き、かいた村の村へ行きました。奉仕女は4名、祈りの友は8名でしたが、関係支援者・職員等総勢60名が集まりました。懐かしい村人は老いても元気に歌い、また、駆け寄って下さる姿に胸が熱くなりました。

眞山知恵子

植木 道子

賛助金・献金

ありがとうございました

(7～10月分)

佐藤元紀、大沼昭彦、市橋みはる
東洋英和女学院中高部宗教委員会
加納美津子、明治学院中学校・東
村山高等学校、西村多見子、村田
充子、石塚八重、藤沢ベテル伝道
所、吹原当恵子、坂本健、酒井忍
八巻紀子、野上清水、牛込弘方町
教会、矢島一夫、今井佳代、野瀬
美加子、余郷志津子、山上洋子、
田浦教会エレミヤ会、村田充子、
加藤大、加藤明彦、小谷志保、藤
村誠、石床愛次、中川彦春、今井
佳代、田中彩子、川口博司、小林
充子、大槻圭史、望月栄一

(敬称略)

★ベテスタの日は、9月22日かいた婦人の村を会場にして開催され、4名の奉仕女をはじめ支援者のお客様と村人たちが暖かな交流を持つことができました。

★住所変更のお知らせ

今堀愛子さん(みんなの祈り友)

〒230-0011

横浜市鶴見区上末吉1-1-16

ウエルネスシップ3世402

★2017年版「日々の聖句」ができた。

した。本部または、お近くのキリスト教書店でお求めください。来年の「年の聖句」は、「私はお前たちに新しい心を与え、お前たちに新しい霊を置く。」(エゼキエル書36章26節)です。毎日、新しい霊の糧をいただきますよう。

★理事会

第206回 6月25日 於：いずみ寮

茂呂塾保育園B棟園舎改修工事・落札業者決定・工事発注について承認議決
第207回 9月10日於：茂呂塾保育園

①社会福祉法改正に伴う定款変更事前審査用案について②いずみ寮中規模修繕工事入札について③かいた婦人の村建替え事業について承認議決された。

第208回 10月15日於：いずみ寮

①いずみ寮中規模修繕工事落札業者決定②定款変更について承認議決された。

★評議員会

第9回 10月15日 於：いずみ寮

定款変更について意見を求め、原案通り理事会に諮ることを了承された。

★編集後記

社会福祉法の一部改正による定款変更認可手続きの真最中です。年度末には完了する予定です。(佐藤 元紀)

2016年11月15日発行

発行人 大沼 昭彦

編集責任者 佐藤 元紀

印刷所 (株)印刷センター

発行所(年3回発行)

〒178-0061

東京都練馬区大泉学園町7-17-30

社会福祉法人ベテスタ奉仕女母の家

<http://www.bethesda-dmh.org/>